

はじめに

私たちは、全部床義歯を専門とする教室に所属しています。卒直後、私（水口）がこの教室に入ったのは、「全部床義歯はよくわからない、むつかしい」と思ったからです。当時（三十数年前）には現在のようにカラーを多用した本やDVDは存在しません。ライターの先生に質問しても「まあ、こんなもんでいいんだよ」みたいな口調ではっきり言ってくれません（私が理解できなただけかもしれませんが）。それで、全部床を専門とする教室に入ったのですが、入ってみるとちょっと違いました。先生や先輩方はいつも全部床や補綴のことを議論しています。ここはこうすれば、こう印象すれば、こういう形になるんだよ、と具体的な表現で（それぞれの表現は違うのですが）教えてくれます。また、その先輩自身が進化していくのを見ることもできました。おかげさまで、その先輩方よりうまくなったとは思えませんが、相当な見識を得ることができたと思っています。

最近、表現力のある手法を用いた教育コンテンツが充実してきたと思います。またそれぞれのコンテンツで示されている義歯は、道理に合った、統一的な形態をしていると思います。つまり、全部床義歯についての正しい理解が浸透してきていると感じられます。しかし、まだまだ十分ではない気がします。明確でわかりやすく、一貫通貫で表現したものがいいと感じました。本書はまさにそれを意識したものです。基本的だけれども、すべてに通じる事項をできるだけわかりやすく、具体的に、でも文字は多すぎない。

全部床義歯の製作過程で、次のステップに移るための情報伝達は、模型や咬合器、蠟義歯です。また、印象採得では、辺縁形成の運動の強さや印象材の硬さによって形が違います。chapter11で提示した全部床義歯のCAD/CAM化の目的は、これらの変動を消去し、数値で表現できる製作手法を確立することです。でもまだ実用には遠いので、言葉や写真に頼らなければなりません。本書を読むときはぜひ頭の中でCADを働かせ、義歯周囲軟組織の動きやそれに対応する義歯の形をできるだけ具体的にイメージしてください。根管治療で根尖のアピカルシートやステップバックを形成するときには、デンタルやCTのイメージとファイル先端のイメージを合成し、頭の中でファイルを動かしながら手も動いている、という感じだと思いますが、まさにそのようにしてください。

高齢者医療、在宅医療においては、多職種連携が必須です。歯科医師に要求されるのは、咀嚼機能回復です。義歯に関するスキルの低い歯科医師は、連携に参加できないばかりか、連携のなかで歯科医師は不要であるとみなされることになりかねません。近年、オーラルフレイルの概念が提唱され、歯科医師に対する口腔機能回復の責任と期待が高まっています。

筆者らは、若き歯科医師に、義歯に関するスキルを十分に磨いてほしいと考えています。本書には、われわれが全部床義歯の患者さんに相対するときに、いつも考えていることを余すところなく記述いたしました。臨床を議論するのは楽しいものです。本書を議論のネタにいただければたいへん嬉しいです。